徳院より妃上の書に

就き碧梧桐氏

より虚子氏に

に問はんとするは何

故にや

妃上は先生に

故にや

子規先生曰く

書は正直を尊び

に書きさへすれば必ず

理想あるものぞと

。。

子曰く自分の思ひ

と思つた字を能く

注意して見るやうに

心掛ければ話はた

心地はよ
くなる。
書は上るやうで
子規先生晩年自
分の書は俗気があつて
こいけないと言邪
魔な字を書きたい
ばかりの書は無いぞら
うかと思はれる。
意味は無かつた

益々本は無かりし
はしも明治三十四年
頃の先生の字は余程
変化して無論篆文
と異なれる先生は
晩年迄一定の字は無
かりし
中村不折曰く
子規子の書は天
才である

才で書き

子規先生高恵

筆書きおよび以上

弟子の好み

不異

有三古夜

土子俗

石生

門間子

修子

岩代信夫郡瀬上町
門間春雄様

十一月三十日
本所茅場町
伊藤左千夫

門間久雄様
左生

伊藤左千夫書簡

門間春雄宛

特別
文庫14
C47